
三泊四日

たまねぎ侍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三泊四日

【Nコード】

N2393W

【作者名】

たまねぎ侍

【あらすじ】

崎ヶ原第二高等学校吹奏楽部の部員全48名は、毎年恒例の強化合宿へと出かける。

個人の技術、全体のクオリティの向上もちろんだが、合宿を通して、部員の親交を深めるというのも大切な目的だ。

そんな中、三年生の有岡裕也は密かに二年生の織部美紅に思いを寄せていて、その気持ちを伝えられないままだった。今回の合宿で、かならずや告白しようと計画を進めているのであった。

実は、織部美紅も有岡裕也に思いを寄せていて……………

プロローグ

僕の後ろには、君がいる。

苦しそうに、楽器を吹いている。

僕は君を助けたいんだけど、どうしていいのかわからない。

どう言ってあげればいいのかもわからない。

でも、ひとつだけわかること。

君が好き。

.....

でも、

僕は君にどう思われているのかな。

嫌われているのかな。

だとしたら嫌だな。

聞いてみたい。

でも怖い。

だから、

ずっとこのままの関係でいよう。

それではいけないと思うけど、

今はそうしていたいと思うんだ。

君を傷つけないから。

プロローグ（後書き）

初投稿なので、なんか怖いです。

ですが、皆さんの意見がぜひ欲しいので、どんな批評であっても受け入れますので、よろしくお願いします。

普通の日常 その1

五月。うちの部活に、新たに15人の新入部員がやってきて一ヶ月が経とうとしている。

少し前まで不安そうな顔をしていた新入部員も、今は各パートの先輩と馴染んで、とても明るい雰囲気の部活になっている。

僕が所属する低音パートにも、今年、三人の仲間が増えて、総員五名になった。最初はどうやって話を切り出すのかも考えないと出来ないくらい、緊張していた。でも、そのうちに慣れてきてくれて、他愛のない愛想話も出来るようになった。結局は僕が人見知りだったっていうオチなのかもしれないけど。

低音パートには、二年生がいない。他のパートにはたくさんいるのに、低音にだけいない。なんでかっていうと、楽器が無かったから。

崎ヶ原第二高校は、創立して90年以上経っているが、吹奏楽部が出来てからは、まだ8年目だ。かつてこの高校は女子高で、吹奏楽部は無かった。前の校舎が古くなって、建て替えた時に、同時に男女共学の高校にして、そのときに吹奏楽部が誕生したらしい。

だから、楽器が少ない。本当は、15人も受け入れられるほど楽器がないのが実情だけど、今後の発展を考えて、この人数を受け入れたのだろう。今まで一人で占拠してきたチューバも、後輩が入ってきてからは主に後輩が吹いている。後輩の吉は、吹奏楽未経験者で、まだうまく音を出せないでいる。だから、吉がすこしでも早く上達してくれるようにと、自分が吹きたいのも我慢して、吉に吹かせてあげている。先輩の優しさでこと。

でも、吉は音楽にまったく触れていなかったせいか、やってもあまりうまくなったように感じない。かといって、練習をサボっているかと言ったら、逆に僕よりも集中して練習している。だから、あま

りきつくは言えないのだ。

いつものように、吉が練習している間、僕はやることが無い。だからと言って、遊ぶわけにもいかない。なにせ自分はパートリーダーである。時々、吉から質問が来ることがあるけど、そんなに難しいことじゃない。音がうまく出ないといった類の質問が大半だから、うまく説明してやれば、それで終わりだ。

暇だから、ここで低音パートのメンバー紹介を軽くしておこうと思う。

まず、パートリーダー兼チューバ担当、有岡裕也。ありおかゆうや

中学一年から吹奏楽を始めて、ずっとチューバを吹いている。だから、すこしだけ肺活量に自信がある。さすがに運動部には勝てない。でも勝ってみたい。男のくせにピアノが弾けて、習い始めて10年が経つ。中学時代は専ら伴奏専門で、歌いたかったのに、本番で歌った記憶は一回も無い。最近、やっと自分の思うように音ができて、ちょっと得意げになっている（と自分で自覚している）。

そして、さっきから横で必死にチューバを練習している一年の吉よし卓三。たくぞう

中学の頃は将棋部で、大会で何回も良い賞を取ったんだとか。なんで急に吹奏楽部に来たのかは不明。だから、いづれ聞いてみるつもりでいる。吉はいろいろな面白いところがあって、椅子の上に正座で座ってしまったりもする。根っからの純日本人なんだろうな。家でも一人で畳の部屋に座っている姿がなんか目に浮かぶ。

次に、バクスラリネット担当、一年生の鈴木みなみ。彼女は中学時代陸上部だったが、途中でやめて、帰宅部になった。彼女も個人レッスンでピアノを習っていて、クラシックは結構知っているらしい。本当はクラリネット希望だったが、残念ながらバスクラリネットに降格(?)してしまった。でも、彼女はいつも、すばらしい集中力で練習をしている。だから、僕なんて、あっという間に抜かれてしまいそうな気がする。

もう一人の一年生、コントラバス担当、小笠原希美子^{きみこ}。彼女は小さい頃からバイオリンを習っていて、今現在も継続中。だから弦楽器の扱いは慣れたものだが、バイオリンとコントラバスはいろいろ違うみたいで、特に指の感覚が難しいらしい。中学時代は陸上部だったらしい。その細い体系とは裏腹に、すばらしい筋力を持っているのだろう。それに、彼女は特進クラスに所属しているから、その頭の良さは折り紙付きなんだろうな。まさに文武両道という言葉がぴったり当てはまるのかもしれない。

最後に、僕と同じく三年で、コントラバス担当の小野田詩織。

彼女には今までいろいろ迷惑ばかりかけてきて、そのたびに叱られた。本当なら彼女がパートリーダーになるべきなのに、いつの間にか押し付けられてしまった。皆を引っ張っていく力は、きっとこの部活内ではトップだろうと思う。音楽に対する知識も僕よりずっとあって、先生がいなくときの合奏などをたまにやったりする。他の部員からは絶大な人気を受けているらしいが、彼女とは腐れ縁なので、なんとも思わない。

とまあ、こんな感じのメンバーで、低音は成り立っている。他のパートも紹介したいところだが、面倒なので割愛させてもらおうか。

そんなことを一人考えながら、吉の音を聞いていた。うーむ・・・以前と比べても全然発展がないな。ちょっと言っておくか。

「なあ、吉」

「はい、先輩。」

「お前、今どんな気持ちで吹いてたんだ？」

「どんな気持ちっていうと・・・」

吉はそこで黙り込んでしまった。やっぱりそうだ。

「吹奏楽っていうのは、ただ音が出て、楽器が吹けるだけじゃ駄目なんだ。もっとも必要なものは気持ちなんだよ。楽器を、こんな音で鳴らしてやるっていう意志とか心構えが必要なんだ。吉にはそれが無いから、いつまで経ってもいい音がならないんじゃないの

か？」

「意志……ですか。」

「そうだ。意志、だ。案外難しいけどな。」

「先輩は、どんな気持ちでチューバを吹いてるんですか？」

「俺はな、このチューバを恋人だと思って、すっごく丁寧に吹いてる。丁寧に吹いても、小さな音で吹くっていう意味じゃなくて、姿勢だとか、ブレスの仕方だとか、そういうことをいちいち気をつけながら吹くってことだ。」

「なるほど。だから先輩の音は繊細な音がするんですね。」

「そうだ。……っていうか、俺の音、そんなに細い音してるか？」
「だとしたら大失態だ。一本しかないチューバが、合奏を支えられなかったら、それで終わりだ。なにも結果がでない。」

「……どう思う、詩織。俺の音って、そんなに細い？」

「なんで私に振るのよ。第一、弦バスの方がチューバより音小さいんだから、こっちから聞いたらどんな音でも合奏を支えてるように聞こえるわよ。でも、一つだけ言うなら、吉君が言ってる繊細っていうのは、細かいところも注意できてるって意味で言ってるんじゃないの？」

「そういうことなのか？ 吉。」

「はい、そういうことです。すいません、なんか、先輩の悪口言っただけになっちゃって……。」

「いやいや、そこはお前が謝る場面じゃないよ。意味を履き違えた俺が悪かった。すまん。日本語ってやっぱり難しいな。」

「ですね。僕もそう思うときは何回もあります。」

「まあそれでも、裕也に比べたら、吉君の方が数倍しっかりとした日本語使っているけどね。」

「う……。それを言われると何も言えない。俺は確かに頭が悪いし、無頓着だし、面倒臭がり屋だけど、それでも、人並みだと思っている……。つもり。」

そんなことで言い争っていたら、鈴木さんと小笠原さんに笑われ

ていた。なんか情けない。僕は急に謝りたくなって、

「すまないな。こんなパーティーダーで。」

と言っておいた。無論これを本気で言っていると思っている人は、
少なくとも低音パートにはいないと思った。

普通の日常 その2

そんな話をずっとしていたら、いつの間にか合奏の時間が来てしまった。いつも通りチューニングを済ませて、合奏での自分のポジションにつく。

数分して、先生が来た。他の学校では、講師の先生を呼んでいることが多いが、うちの部活には、そういったことが出来るほど部費が下りてきてないし、そういうことをしようという意識もあまりないので、合奏指導をするのは部活の顧問の先生だ。音楽の先生ではないが、中学・高校時代に吹奏楽を経験していて、一回だけ県大会に行った事があると言っていた。

「さて、今日も合奏を始めるが、その前に、今年も行う、強化合奏のことについて説明しておこうと思う。」
そう言うと、部員は全員歓声を上げた。

崎ヶ原第二高校吹奏楽部は毎年夏休みに、個人技術や、バンド全体としての合奏のクオリティを向上させるために、毎年山の奥地にある施設まで合宿に行く。その施設では、二十四時間好きな時間に音が出せるように配慮がしてあって、やろうと思えば夜中にだって合奏が出来る。山の奥地にあるのはこのためだ。

去年、一昨年とこの合宿に参加して、自分の技術はとてつもなく進歩したと思う。二年前、自分が一年だったときに出ていた音は、今の吉の音よりも酷い音で、先輩からは、かなり酷評を受けていたし、自分でも判っていた。どうしていいのか分らずに迷っていたとき、この合宿をやって謎が解けた。おかげで今のような、芯のある音が出せるようになった。

また、この合宿は、楽器と仲良くなれるいいチャンスでもある。
『楽器と仲が悪いと、絶対にいい音は出ない。楽器も人だと思って

接するべきだ。』というのがうちの顧問のモットーである。実際、それは確かだと思う。それをじっくりと確かめることができるというのも、この合宿の魅力の一つだと、僕は思っている。

また、先生の口からは述べられないが、部員にとってみれば、この合宿を通して、部員ともっと交流を深めようという大きな目的がある。毎年、この合宿には自由時間というものがある。普段縛られた生活をしている高校生は、自由時間というものを取ると、どうも小学生並みに遊びたくなる傾向が特に女子にあるらしい。毎年その騒ぎ様は変わらず、去年も一昨年も、凄いものだった。皆が普段溜めていたストレスを、一気に放出していく様を、まじまじと見るこ
とが出来る、ある意味貴重な時間だ。

そんな自由時間を使って、パートごとに、様々なことをする。山の中の大自然で思いっきり遊ぶパートもあれば、そこらへんの芝の日陰に座り込んで、ずっと色々語っているパートとか、様々だ。低音パートは、去年も一昨年も、川の流れに足を浸しながら、いろんなことを話していた。それはそれで、いいくつろぎになる。きっと今年も、同じような形式でいろいろ語り明かしていくのだと思うと、なんだか急に楽しみになってきた。

今年の合宿は、三泊四日と、いつもより一日泊まる日数が多いらしい。なんでかと後で聞いたら、今までは出ていなかった年明けのアンサンブル・コンテストに、今回は出るつもりだから、少しでも個人レベルを底上げしたくて、無理を言って一日延長してもらったらしい。それだけ今年の合宿に賭ける思いは強いみたいだった。

それに、僕は今年の合宿で、一つ、やらなければならないことがある。それゆえに、僕は今年の夏の合宿が、生涯忘れないものになる
と思っている。

合奏は、いつも通りに進んだ。大会の曲をとりあえず一回通して

みて、そこから細かい指導に入っていくというのがいつものパターンだ。今日もそのパターンだったのだが、台風でも来ているのだろうか。いつもの倍以上合奏に気合いが入っていた気がする。指揮棒を三回も飛ばすから、それはもう面白くて堪らなかった。

だが、曲の方はしっかりと仕上がってきていて、この調子でいけば、大会に間に合うだろう。でも、まだトッピング的な部分が足りない。このままだとストレート過ぎる演奏で、なにも面白みがない。だから、合宿に行つてうまく表現を付けてからコンクール本番に臨む。それがこの部活のセオリーだ。

また、合宿に最良の状態に参加するためには、今は自分の演奏に専念した方が良さそうだ。まだまだうまく指が回っていない所や、音が当たっていない所など、課題は山積みだ。

ちなみに、コンクール本番は、合宿が終わってから三日後。合宿で身につけた技術を、残り一週間であるべく熟成させて当日に持っていかななくてはならない。なかなか厳しいものだ。

『ありがとうございますー。』

『さようならー。』

今日の部活が終わった。

今からは、約一時間、生徒が自主的に練習をする時間だ。主に合奏で注意されたところを重点的にやっていったり、個人の技術で足りないと思うところを徹底的にさらったりする。今は、吉と交代交代やっているから、出来るのは二日に一回。でも、十分効果が期待できる。今日は吉が練習する日だから、とりあえずやりそびれていたファイル整理でもしていようか。

と思っていたら、急に背後であまり聞き慣れない声が僕を呼ぶ。

「先輩、ちょっと聞きたい事があるんですが、いいですか？」と言ってきたのはトランペットの二年生、吉原亜由美さん。彼女は、中

学からずっと吹奏楽を続けているだけあって、技術は素晴らしい物を持っている。だから、彼女が僕に聞きたい事なんて、あまりないと思うんだけど…。

「先輩って、いつまでこの部活に残るつもりなんですか？ 今度のコンクールが終わったら引退しちゃうんですか？」

「いや、まだ決めてないけど、それがどうかしたの？」

正直なところ、僕がコンクールで引退してしまおうが、その後も気ままに残っていようが、この部活には影響を与えないと思っている。僕が辞めてしまえば、チューバは吉に交代するだけだ。コンクールよりも後には、そんな重大なイベントがあるとは言えないし。

「先生がさっき言ってたじゃないですか。今年からはアンコンに出るって。だから、先輩もアンコンに出るのかと思って、聞いてみたんです。」

アンサンブル・コンテスト、略してアンコン。夏の全国吹奏楽コンクールと大きく違う点は、夏のコンクールは団体なのに対し、アンコンは少人数だ。そのため、個人の技術が多く問われる。団体だったら許されたミスも、このアンコンでは完全に見抜かれてしまう。また、少人数で行うので、強弱の付け方にも気を配らないといけない。少人数だからこそ、音量の大小は普段の倍くらい差を付けないと、本当に薄っぺらい演奏になってしまう。演奏者全員が息をぴったり合わせて、コンビネーションを大切にしながら演奏することが要求される。

要するに、アンサンブル・コンテストで上の大会に進出するためには、『技術・表現・チームワーク』この三つがどれだけ高められているかがポイントになる。だからアンコンは難しい。

「アンコンか。今はあんまり考えてないかな。残れって言われたら多分残るだろうし。」

僕は高校を卒業したら、大学に行かずに就職するつもりだから、いつまで部活に残っていても問題ない。吹奏楽で名のあるような学校は、進学する三年生でも年明けのアンコンまで残っている生徒もいるみたいだから、決して変なことではないと思うし。

「そうですか。ありがとうございます。」

そう言って、彼女は自分の位置に戻り、またトランペットを吹きはじめた。

自主練の時間も終わり、帰路につく。駐輪場で自転車の鍵が見付からない。あれ、このポケットに入れておいたはずだけだな。

必死になって探している時に、二年生の駐輪場から話し声が聞こえた。二年生の駐輪場は僕のいる駐輪場の二階だ。小声だから、なにか入り用な話らしい。一回聞こえてしまうと、つい盗み聞きしたくなるのが男という生き物。どうも気になってしまったから、密かに聞いていた。

「今日、先輩に聞いてみたよ。コンクール終わったら引退しちゃうのかって。」

「で、どうだったの、答えは。」

「まだ決めてないんだって。でも、残って言われたらアンコンまで残るって言ってたよ。」「へー。そうなんだ。あ、でも、あの先輩は就職するから残れるんじゃない？他の先輩は大学に行くって言ってたし、もしかしたらコンクール終わったら引退しちゃうかも。」

「私もそう思ったんだ。なんか残念だよ。今までずっと一緒に活動してきた先輩が、一気に居なくなるなんて、なんか今の感じからは考えられないよね。」

「うん。本当に。で、美紅、なんでさっきからずっと考え込んだよ。うな顔してるのよ。なんか変だよ？美紅、何かあったの？」

「：別に、なんでもないよ。今日ちょっと頑張ったから、疲れちゃった。」

「ふーん。それにしてもさ、――――――――――」

それまでで聞くのを止めた。女子高生の会話は基本長い。放課後や部活後の、今から帰るといふ時の会話はもっと長い。平気で二・三時間、話題を途切れさせることなく語り続けているらしいから、信じられない。女っていうのは、こういう生き物らしい。

やっと鍵が見つかった。手持ち鞆の、奥底に落っこちていた。気がつけば、もう夜七時近い。部活が終わった瞬間から、僕の腹の虫が引っ切りなしに鳴っていたのを忘れていた。僕は、鞆から乱暴に出された教科書や参考書を、また乱暴に鞆に戻し、自転車の前の籠に入れた後、いそいそと学校を後にした。

翌日の部活の時間、そこに織部美紅の姿は無かった。

織部美紅の憂鬱

織部美紅は、悩んでいた。

最近、どうもランペットがうまく吹けない。必死にブレスしているつもりなのに、全然息が足りていない。やっぱり駄目なのかな。私。楽譜は読めても音がでないじゃ、何の役にもたてない。いっそ居ない方が皆の役に立てるのかもしれない。ついこの前も、

『全然吹けて無いじゃん。ちゃんと練習してるの？今後、これ以上の進歩が無い様だったら、その時には、今年入って来た一年生に席を譲ってもらうことになるよ。』

って言われた。

決して練習をサボっている訳じゃない。時間数を数えれば、部活内で三本の指に入る自信がある。でも、何回練習しても、全然進歩がない。自分でも分ってる。じゃあ、どうしたらいいの。それが知りたい。

いくら考えてみても、その答えは出てこない。今のままだと、自分は部活の足を引っ張るだけの存在になってしまう。だから、やっぱり私は・・・この部活に居ない方がいいのかな。

でも、そこには先輩がいる。部活に入ったら、いつの間にか好きになっていった、先輩。有岡先輩。お世辞にも格好いいとは言えないけど、先輩が必死になって後輩の世話をしている姿を見ると、いつの間にか頭の中が真っ白になってしまっただけ。あれって魔法なのかな。現実の世界に魔法なんて無いことは分かってるけど、まるで自分が魔法にかけられたような錯覚を感じることがある。今までもくく会話したことない・・・っていうか、恥ずかしくて面と向かって話せないけど、多分先輩には自分は無愛想な人だなんて思われてるんだ。もし、私が先輩に、ありえないけど、告白・・・しないけど、したとして、返ってくる返事なんて、分かりきってる。君には、

あまり興味が持てない。そう言われてお終いなんだ。

なんか男ってずるい生き物だと思う。女性の気持ちを簡単に踏み躪るんだ。その癖して、自分が振られると、途端に弱くなって、また近づいて来るんだ。ヨリを戻して欲しいとか、本当に愛していたんだ、とか言ってるね。本当はそんなことちっとも思っていないのに。

亜由美は、先輩は残れて言われたら残るらしいって言ってたけど、例え残ったとして、何を目的に残るんだろうか。ただ吉君が気になるから残るっていうことなのかな。それとも、誰か思っている人がいるんだろうか、この部活に。だとしたら、誰だろう。やっぱ、同じパートの詩織先輩だろうか。はたまた、二年の誰か？ いや、もしかしたら一年生の中にいるのかもしれない。このままもたもたしていて誰かに先を越されたら、私は立ち直れなくなる位落ち込むだろう。そうなることが分かっているから、なるべく早く実行に移さないといけない。やっぱ、自分から先輩に思いを伝えるしかない。隠れてたって時間が過ぎていくだけだ。だから、自分の口から、面と向かって、先輩に打ち明けなくては。結果なんてどっちでもいい。それはもちろん、先輩から良い返事がもらえればそれはうれしいのだけど……。

そんなことを考えながら授業を受けていたら、いつの間にか六時限目が終わり、もう放課後の時間が近づいていた。あれほど眩しかった太陽の光も、今となっては大分傾いてきている。今日は、あまり乗り気じゃない。あまり部活に行きたい気分にならない。あんなにたくさんのことを一気に考えたのは、多分生まれてはじめてのことだと思う。なんだかもう疲れてしまったから、亜由美に適当な言い訳を言って、今日は帰ろう。それに、今日先輩の姿を見てしまったら、多分自分は鬱になってしまう。今日考えたいろんな事がずつと頭の中でグルグル回って、絶対演奏に集中できない。

わたしって、なんでこんなに弱いんだろ。自分でも呆れちゃう位、弱い。今の自分の心は、ちょっと触っただけで、すぐにバラバラに

崩れてしまいそうな気がする。

———どうしたらいいんだろう。

コトワリ

太陽が昇る。一日が始まる。

太陽が沈む。一日が終わる。

その繰り返しの中で、私はいろんなものを見てきた。

人が泣き、笑い、喜ぶ姿を。

人が生まれ、死んでいく姿を。

どんな星も、いつかは壊れるように、

どんな綺麗な花も、いつかは枯れてしまうように、

すべての物はいつか壊れ、消える。

その摂理は絶対だと分かっているけど、

それに反抗してでも、

出来ないとしても、

永遠に失いたくないものがある。

それでも太陽は昇る。一日が始まる。

それでも太陽は沈む。一日が終わる。

先の見えないこの道を、

がむしゃらにでもいい。

一歩ずつ歩んでいく。

合宿前日

夏の暑さが蒸し返す中、合宿が、いよいよ明日に迫った。明日からの事を考えてしまうから、合奏に全然集中出来ない。それは、僕だけでは無いはずだ。

三日前から、合宿のために支度を始めた。今年で三回目なのに、準備にかなり手間取る。自由時間にどんな事をパートでするのかを考えるのはパトリダーの役目だ。と言っても、勝手に決めてしまいう訳にもいかないから、最終的にはパートの総意があって決まる。低音パートでもいろんな意見が出たが、皆それぞれ主張するものがあったので、結構、去年・一昨年と同じく川辺でトークというところに落ち着いた。と言うよりかは、食い下がって貰ったというのが正確だ。

「でもさ、今年の合宿って一日多いから、あんまり無理出来ないな。」

「無理出来ないというか、無理させないわ。一年生は、合宿が初めてなもの。自由時間にそんなにはしゃぐと、後に響く気がするわ。」
「そうだな。だから自由時間は例年通りにしたつもりなんだけど。」
「当然よ。でも他のパートは、山を歩くとか、敷地内の池で何かするって言ってたわ。どうかしてるんじゃないかしら。」

「僕もそう思うよ。絶対四日目にはバテてるよ。」

「そうね。なんか、いろんな意味で楽しみになってきたわ。」

この時、女は腹黒いと確信した。やっぱり女って怖い。

そんな事を話していると、吉が、

「あの、先輩、僕の為にそんなに悩んで貰わなくても大丈夫ですよ。僕は先輩について行きますから、先輩のやりたいことをやって下さい。」

と言ってきた。パート内の他の一年生も同じ様な事を言っているが、そうはいかない。

「この合宿は、あくまで楽器の演奏力の向上を狙ってやる訳だから、とても体力が要るんだ。だから、演奏者の体力が無かったら、この合宿の意味が無くなる。だから、自由時間で体力を取られてしまっただけじゃないんだ。」

よく分からない説明に、詩織が付け足した。

「それに、低音パートって、他のパートよりも体力の消耗が激しいの。他のパートが三十分吹いた時の体力の消耗よりも、低音パートが三十分吹いた時の体力の消耗の方が多いから、すぐ疲れちゃう。だから、低音パートは自由時間を休憩時間としてとった方が、ずっと効率よく練習が出来るのよ。そういうことも、一応このパートリーダーは考えてるみたいだから、ここは素直に理解した方が正解かもしれないわ。あんまり押し付けられるつもりは無いけどね。」

：助言、ありがとうございます。と心の中でつぶやいておく。

結局、それで論議は終了した。一年生は、もっと活動的な自由時間を頭に想像していたのかもしれないが、残念ながらそれは無かった。でも実際に合宿所へ行ってみて、その自然の雄大さを見ていれば、川辺で語り合うのも悪くないと思ってくれるだろう。それを期待したい。

それよりも、最近、来たり来なかったりする部員が一人。それがとても気になる。この前まで、あんなに楽しそうに部活をやっていたのに、最近は部活に来るのがとても辛そうに見える。楽器の音もまた弱々しくなってきたりしているし、合奏をやってもなんか考え事をしてるようで、全く合奏に身が入っていない。合宿には来るらしいが、今日も姿が見当たらない。何があったのだろうか。でも、僕が気にした所で何も変わらない。そんなものだ。だから、無理に触れて事態を大きくするよりも、今はそっとして置いてあげたほうがいい。それは、過去の自分の経験から思ったこと。今は詳しく語らない。ともかく、彼女がこの合宿で、何かしらの毒を出せたなら、

それでいいと思う。

コンクールが近づく、自分では気づかないけど、脳が常に緊張している状態になる。今まではあまり気にしていなかった小さなミスが、急に大きな過失に思えて、自分ってなんでこんなに出来ないんだろう。って悩むことがよくある。いつもなら、その悩みは部活後の雑談で発散していたのに、いつの間にか皆が真剣に自主練に取り組んでいて、話しかけづらい環境になっていた。結局自分はその悩みを打ち明けられずに、どんどん蓄積されていって、精神的に不安定な状況になる。そうすると、今休みがちになっている部員と同じように、部活がきつい。という心境になる。

彼女もきつと、そのような理由で、休みがちになっているのだろう。実際のところは、本人しか知らない。

今はそんな事に首を突っ込んでいる場合ではないのは分かっている。もっと練習しなくてはいけないことも分かっている。でも何でそこまで気にかけているのかといえ、それはつまり、その人は僕にとって特別だから。それだけだ。

公園にて

――その日の帰り。僕は、直接家に帰らず、気分的に、近くの公園に寄ることにした。ブランコがあつて、その下には砂場がある、ごくありふれた公園。僕は、何か思い悩んだりすると、ついそこに寄ってしまう。前に来たのは、僕が低音パートのパートリーダーを任された日だ。三人の後輩を従えて、果たして自分はやっていけるのかと、一人で悩んでいた。結局ここでは方針が決まらなくて、諦めて家に帰ったら夜九時を回っていた。家に帰った後も必死に考えたのに、駄目だった。最終的にパート練の時間を使って、大まかな方針を固めた。あの頃の自分は焦っていた。

今日は、その公園に先客がいた。誰かと思ったら、崎ヶ原二高の制服を着ている女子生徒。よく見れば、僕はその人のツインテールに見覚えがあつた。少し背が低めの、崎ヶ原第二高校吹奏楽部員。織部美紅。今日は部活に姿を見せなかった、最近休みがちになっている、その本人だ。ブランコに深く腰掛けて、背も曲がり、完全に無気力に見えた。遠くから見てもよく分かる。相当悩んでいるのだ。放っておくのが正しいと分かっているながら、放って置けなかった。少しでも話しが聞きたかつた。

僕は、ゆっくりと自転車を公園の入り口に走らせた。

公園の入り口に自転車を停めると、向こうはすぐに僕の存在に気づいた。そしてその存在が僕だと分かると、またブランコに深く腰掛けた。俯いているから、表情が分からない。でも、笑っているはずはない。僕は、彼女の隣のブランコに腰掛けた。

意外にも、向こうから話しかけてきた。

「…先輩。」

「ん。」

「：私って、駄目ですよ。」 彼女の声は、震えていて、苦しうだった。

「なんで急にそんなことを。」

「だって私：、コンクールがすぐだって言うのに、全然曲が吹けない。音も出てない。音色だって悪い。何一ついい所が見つからないんです。先生から注意ばかりされて、何も合奏が進んでいかなかった。友達に言われるんです。だから私、もうこの部活にいない方がいいんじゃないかって思うんです。人に迷惑ばかりかける訳にはいかないし：。」

「でも、そうしたら自分に悔いが残るんじゃないか？」

「：確かに、そうです。でも、自分さえいなければ：他の人達もっと効率よく練習できると思うんです。」

「人のためなら、自分はどうなっても構わないってことか？」

「：そうです。それが、今の自分に出来る最大限のことです。その結果、大会で少しでもいい結果が出たなら、私はそれでいいんじゃないかって思います。」

「：そうか。でも、明日からの合宿は来るんだよね？」

「はい。合宿に行って、それで、今後自分がどうするか決めようと思ってます。」

「うん。それでいいと思う。焦ることはないよ。」

選択を焦ることはない。選択を間違わないためには、十分な思考が必要だ。それは苦しい事だけど、努力しなければ、反動は自分に返ってくる。選択を誤った場合、それを正すのは難しい。

彼女は、自分が思っている事をありのまま、少しずつ語っていた。普段明るい彼女が、ここまで深く悩んでいたとは全く気づかなかった。

彼女をこのようにしてしまったのは、彼女自身のせいではなく、部活のせいだ。楽器がうまく鳴っていないなら、上手くなるまで、分かる人が教えるのが普通だ。でも、今の部活で部員を見ていると、

自分だけが上手くなろうと、必死に練習して周りとの関わりが薄くなってきている。パート練でも、仲のいい部員は、技術的に遥か上にいて、とても追いつけない存在になってしまった。でも、それに気づかないメンバー。最終的に、技術が劣っていると批判される。これでは、パート練の意味が無い。彼女の居場所が無くなるのも必然的だ。

それでも彼女は明日からの合宿に行くと言うのだから、上達したい気持ちは十分にあるのだ。今回の合宿で、トランペットパートが彼女の事について、気づいて、しっかり対処してくれることを願おう。

それが出来ないならば、僕がなんとかしよう。

「あの…、ありがとうございました。」

「何が？」

「その…、私の話。聞いてくれたので。」

「いやいや、当然だよ。それに、僕もいろいろ考え事があったて、頭の中ぐちゃぐちゃだったんだ。だからこの公園に来ただけで、先客がいたから、仕方ない。家に変えてじっくり考えることにするよ。」

「ふふ。」

「どうした？」

「いえ、先輩に悩み事なんて不似合いですから、ちょっとおかしくて。」

「僕だって、悩みくらいあるさ。部活の事しかないけど。それよりもよかったよ。少しは気が紛れたみたいで。」

「はい。言葉に出してしまくと、頭の中てもやもやしていたものがすっかりした感じがして、少し元気ができました。」

彼女が少し元気を出してくれたので、なんか安心した。彼女が悩んでいることに比べれば、自分の悩んでいたことなんて、なんて小さなものだろう。と思うと、なんか考えるのがばかしくなっ

きた。明日からのことなんて、明日の行きがけに考えれば十分だ。

「先輩。」

「ん。」

「おかげさまでやる気が出てきたので、私、帰ります。まだ明日の支度、整ってないんです。」

「そうか。じゃあ僕も帰るとしようかな。実は僕もまだ支度、整ってないんだ。」

「それでは、また明日ですね。先輩。」

「うん。そうだね。明日からきつくなると思うけど、負けないで頑張るって。」

「わかりました。」

「さようなら。美紅さん。」

「さようなら。先輩。私の名前は呼び捨てで構わないですよ。」

「そうか、じゃあ、さようなら、美紅。」

「はい。」

こうして、僕達は別れた。

合宿二日目 一 一

ついにこの日がやってきた。バス二台を使って、合宿所へと向かう。僕は今、そのバスの中にいる。パートで席を固めたので、隣には吉がいるが、静かに寝息を立てている。

昨日のあの一件があつてから、僕は色々なことを考えた。美紅が、あそこまで思い悩んでいたとは、正直思わなかった。いつも部活で見ている彼女の姿は、難しそうな顔こそしていたが、決して自分が弱いと思っているような顔ではなかった。『私、もうこの部活にいない方がいいと思うんです。』その言葉を聞いたとき、僕は本当にショックだった。彼女の気持ちに気づいてやれなかったことが、同じ部活の先輩として恥ずかしくて、自分に腹が立つ。自分がお人好しだとは思わないが、そこまで悩んでいたなら、普段の行動から察して話をしてやればよかった。そうすれば、彼女にあんな状態になるまで苦しめることがなかっただろう。やはり、彼女は僕が守らなければならぬ。

その本人は、僕の座席の三つ前に座っている。普段の女子高生としての彼女を見れば、楽しそうに友人と話しているし、人付き合いも悪くない、“良い子”だと思う。でも、吹奏楽部員としての彼女を見ると、同じパートの人達にとっては、“お荷物”なのかもしれない。それでも、ほとんど休むことなく部活に来ていることを見れば、彼女は本当に頑張っているのだろう。周りが彼女のことをどう見ているのかは知らないが、僕から言わせてもらえば、こんなに苦しい中、必死に上達しようとしている姿は、他の人ももっと見習うべきだと思う。

先ほどまで、あんなに賑やかだった車内が、いつの間にか沈黙していた。辺りを見れば、合宿所に着く前から騒ぎ過ぎたのだろう。ほとんどの部員が目をつぶって寝ていた。バスが走り始めてから二時間が経つ。窓の外を見ても、高速道路のガードレールが見えるだ

け。何も変わらない景色は、何も面白くない。

しばらくして、サービスエリアで三十分、休憩を取るようになった。この先合宿所に着くまで休憩は入らないということだったので、腰も疲れているし、皆は一斉にバスの外へと出て行った。

トイレを済ませて戻ってきたら、バスの中には誰もいないみたいだった。道中ずっと僕の隣りで寝ていた吉も、仲の良い一年生と一緒に、売店にいるようだった。僕は、売店に行っても何も買う物が無いので、一人で思いにふけていた。

「先輩。」

突然、人の声が出た。この声は、美紅か。

「なんだ。いたのか。」

「はい。別にはしゃぐような気分じゃないので。皆ちよつと騒ぎすぎですよ。」

「そうだな。呆れる位騒いでるな。」

「私、あんまり騒がしいのは好きじゃないんです。自分は騒がないし。だから、今、こうやって車内が静かになっているのが結構うれしいんです。」

「なるほど。」

これ以上、話が続かなかった。話題を探しても見つからなかった。再び車内に沈黙が戻る。なかなか部員が戻ってこない。また、一人で考え事していると、無性に眠気に襲われた。抵抗する必要も無いから、僕はすぐ眠りに落ちた。直後、美紅から呼ばれる声があったが、完全に眠っていた僕は、反応できなかった。それでもうつすらと声だけが聞こえた。

「私、絶対部活続けますから。」それを聞いて、安心した僕は、深い眠りに落ちていった。

午後の昼下がり。学校から四時間かかって、やっとのことで合宿所へと着いた。海拔四百メートルはあるだろうこの高い山の中に、

それはある。街を離れ、深い山の中に入ってくると、その景色に感動した。本当にここは同じ日本なのかと思うほど、何も無かった。コンビニなんてもちろん、一般家屋さえ、ほとんど見られない。見えるのは、広大な森林と、まばらに位置している畑だけだ。よくこんな所で生活していられるものと、正直感動した。僕がここで生活するならば、せめてゲーセンくらいは欲しい。

「今日から三泊、決して短くないし、体力もいつも以上に消費すると思う。だから、無理だけはしないで欲しい。もし体調が悪くなった者がいれば、すぐに申し出て欲しい。あと、夜は相当冷えるから、防寒対策はしっかりしておいてくれ。あと――――」

先生から、簡単な注意があった。毎年同じようなことを言っているから、聞く必要もあまり無いんだけど。いつも住んでいる地域と違って標高が高いので、若干空気が薄い木もするが、それよりも、森の中にいるから空気がおいしい。合宿でなかったなら、ずっと寝転がって森林浴をしたい気分だ。

「各パートリーダーには、日程表と、部屋割り表を分けてあるから、この会が終わった後、今日の合奏の時間までに荷物を運び込んで、確認をしておくように。以上。」

：日程表？部屋割り表？僕はそんなの貰った記憶がないぞ。先生、いつの間にそんなの分けていたんだ。」

と思っていたら、詩織が前から歩いてきた。その手には、二枚のプリント。：ということは。

「パートリーダーが頼りないから、先日、私が貰っておいたわ。」やっぱり。先生も、僕がよく授業でプリントを失くすことを知っているから、あえて僕じゃなくて、詩織に渡したんだろう。

「呆れた。先生、あんたを全然信用してなかったわ。『有岡だときっと失くすだろうから、このプリントは小野田が持っていてくれ』って普通に言われたわ。」

「はは……。僕だって、好きで失くしてるわけじゃないんだけどね。」

「言い訳無用。とにかく、あんたも自分の部屋くらい確認しておいたら？あと日程表もある程度は書き留めておいたほうがいいわ。」
「そうだな。そうさせて貰うよ。どうせ、このプリントはずっと詩織が持つてるんだろ？」

「ええ。合宿途中に失くされても困るだけよ。」
やっぱり詩織は手厳しい。僕よりずっとしっかりしているから、今更だけど、パトリーカーの座を明け渡した方がいいんじゃないかと思う。でも、そう相談した所で、『あんたがもっとしっかり頑張ればいいのよ。』って言って拒否してくる。
…よく分からない。

二枚のプリントをよく読み、必要な所を書き写した後、とりあえず荷物を運び込むために部屋へと向かった。部屋割り表によれば、ルームメイトは四人。無論全員男子で、吉も含まれている。

部屋は、お決まりの座敷だった。十畳くらいあるその部屋に布団四つを敷いて寝るのは、少し贅沢な気もする。部屋の設備は非常に簡素で、布団を収納しておく棚と、二十型位のブラウン管テレビが一つ。あとは、山の風景を楽しめる、ごく一般的なアルミサッシの窓が二枚一対であるだけで、あとは何もない。それが実に合宿っぽいと思った。

「よお、有岡。お前と話すのは何週間ぶりだ？」

「どうだろう。二週間ぶり位じゃないか？赤点魔人。」

「赤点魔人とはなんだ。確かに赤点は取ったがな、回収したから問題ないのだよ。フハハハ。」

・・・こいつは、三年、橋田利行。楽器はクラリネットだ。部活面で見れば、かなりすばらしい人材だが、勉強面で劣りすぎている。今夏も全教科で赤点を取り、逆パーフェクトを取った奴。ある意味で偉人だ。

「まったく。有岡がルームメイトとはついてないな。夜抜け出せないじゃないか。」

「別に抜け出しても何も言わねーよ。面倒臭い。」

「そうか？ そうなのか？ それはうれしいぞ有岡。じゃあお前も一緒に抜け出してくれるな？」

「なんでそうなるんだよ。抜け出してどこ行くつもりだ？」

「それは言わなくても分るだろう？ これは吹奏楽部の合宿だ。むさ苦しいサッカー部の合宿とは違うものがあるだろう？」

「・・・女子の部屋に侵入するつもりか、お前。」

「正解だ。やっぱりお前も男だな。やることが分かってるじゃないか。」

「はあ。それが目的なら俺は行かないよ。次の日からどうなるか分からないから。」

「なんだよ。ノリが悪いなー。瀧はもちろん行くだろ？」

「無論。断る理由もない。そのために、この合宿所の見取り図と、誰がどの部屋にいるのかというリストを作ってきた。準備は万全だ。」

・・・瀧康平。三年だ。橋田と同じくクラリネットの担当。橋田とは気が合うらしく、いつも二人でいる。成績もそこその代わりに、演奏もそこそこだ。決して悪い奴じゃないが、橋田という時は、悪乗りしすぎるから注意が必要。

話を聞く限り、おそらく二人は夜この部屋を抜け出して、女子の部屋へと侵入するだろう。顧問はじめ、付き添いの先生は、夜遅くまで大宴会をしているから、抜け出そうとすれば簡単に抜け出せるのは事実だ。しかし、それが誰かに見つかってしまった時には、逃げようが無いだろう。

・・・一体何がしたいんだ。こいつら。危険を冒してまで侵入する理由が、分らない。

今年の合宿もいろんな意味で疲れるだろうと、つくづく思った。

サービスエリアからここに着くまでの間、あろうことか寝てしまったので、例の計画について考えるのを忘れていた。だから、早急に策を練る必要がある。寝たお陰でバスで酔わなかったのは、不幸中の幸いだろう。

合宿一日目―2―

現在の時刻は午後二時三十分。合奏が始まるのは午後三時三十分なので、あと一時間もある。橋田たちは『下見に行ってくる』と言って部屋を出て行ったし、吉はたたみに座り込んで、熱心に本を読んでいる。何かしたいと思って何も無いので、やる事が無くて困る。せつかくだから、楽器のメンテナンスでもしていようかな。

僕は一人、ホールを目指した。

合奏をするホールはかなり広く、天井も高い。僕たちの部活よりも、もっと大きい規模の団体が合宿をすることもあるため、人は百人くらい入るだろう。広いだけでなく、設備だってしっかりしている。床は全面カーペット張りだし、壁には吸音材。天井のつくりは、響きを意識した構造になっているので、ここで楽器を吹くのはとても心地よい。

まだ合奏まで時間があるので、ホールには誰もいない。最近はずいぶん出していたチューバを、久しぶりに出してみると、なんだかその作業に懐かしさすら感じた。いつも通り、マウスピースを取り出す。ヤマハ67C4。中学二年のときに買って以来、ずっと使ってきた。もつともポピュラーなマウスピースで癖が少ない。自分としては、もつと癖があるものが欲しかったけど、楽器店の規模が小さくて、種類に乏しかった。チューバだけ。

取り寄せてもよかったけど、すぐ欲しかったこともあって、やめた。なんでこんな金属の塊に一万円近く払わなくてはならないのか、少し憤りを覚えながらも買ったのをよく覚えている。

マウスピースの練習は、運指を覚えることよりもずっと大切だ。マウスピースを鳴らす技術は、思ったよりも進歩が遅い。よく、『音が出ているから大丈夫』と考える人がいるが、それは違う。マウ

スピースでなっている音は、一体どういった音色、音程で、それをどのように改善していくのかということを、常に考えなければならぬ。人それぞれ、出す音色が異なるので、完全に区別できるわけではないが、楽器につけて音を出したときに、その人がどんな音を出すのかということは大体予測が出来る。バンドとしては、張りのある音を求めているから、マウスピースでも張りのある音が出せなければならぬ。練習の初期の初期でマウスピース練習が大切だというのは、このためだ。

慣れてくると、この練習は楽しくなってくる。自分の好きな曲を、楽器を使わず、マウスピースだけで演奏する。これで上手く音がはまるようになれば、マウスピースに十分慣れたということだし、おのずと音感も着いているという事になる。

マウスピース練習を始める前に、表情筋を解す。こうすることで、顔中の筋肉がほぐれて演奏しやすくなるし、表情も付けやすくなる。その時には、すぐく変な顔になってしまうので、絶対に人には見られたくない。いざという時は、タオルで顔を隠してからやっているが、その姿さえも、変だ。どこかで見られているのではないかと、いつも心配になる。

深呼吸をする。いつもと違う空間だから、空気の味が違う。とても澄んでいる。静寂に包まれた空間では、呼吸の音さえ響いているような感覚に陥る。

ホールには、運び込まれた楽器が整頓されて置いてある以外、一台のアップライトピアノと、椅子を積み上げた台車が三つあるだけだ。この部屋の風通しは良いが、コンクール本番の舞台を想定して、空調を効かせることが多い。うちの部活も、そうするようにしている。逆に空調を効かせすぎて、寒くなってしまうこともしばしばある。ホールの外と中での温度差が酷いので、外に出た瞬間に調子が悪くなる人もたまに出る。自分も気をつけないと。

そんなことを考えながらも、マウスピースを吹く。今日の調子はどうか。身体の調子が良いから、上手く吹けるかと言ったら、そうじゃない。こればかりは、どうしようもない。でも、毎日吹いていると、上手さの最小値は底上げされてくる。要するに、『経験の差』ということだ。

マウスピースに、チューナーマイクを取り付ける。音階をたどっていったって、今時分が思い描いている音のピッチがどれだけ正確なのかを確認する。マウスピース練の時に音感を矯正しておく、チューニングにかかる時間が短縮できる。チューニングが早く合ということは、曲練をする時間が増えて、詰まるところ、上達のスピードがぐんと伸びる。土台作りが大切という理由のひとつに、これがあるかもしれない。

マウスピースを10分位吹いた。今日の調子はまあいいらしい。日々練習を積み重ねているだけあって、平均値は大分上がってきているみたいだ。吉だってこれくらい吹けたらいいのに……。と思うのは、無理な話だろうか。

本当は楽器のメンテナンスをするつもりだったけど、気分が乗ってきたから楽器を吹くことにした。基礎練習くらい、いくらやっても損はしないだろう。やりすぎはよくないけど。

楽器を取り出す。空調がよく効いているから、楽器を触るとひんやりしている。マウスピースの調子もそこそこ良いから、楽器の調子も良くあって欲しい。僕は椅子に腰掛け、マウスピースを楽器に取り付け、構える。ピストンの調子を確認、抜き差し管を引き出し、スライドグリスを塗ってやる。第二ピストンから出ている抜き出し管の調子が悪い。仕方なく、そこにバルブオイルを塗って、調子を見る。バルブオイルを注すことで、付着している汚れが取れてくるので、抜き差しが楽になる。ちょっとした裏技だ。

やはり、汚れが溜まっていた。注したバルブオイルが、真っ黒になって管に貼りついている。汚れごとオイルを拭き取り、もう一度

スライドグリスを塗ると、他の管同様、滑らかに動くようになった。こういう時のために、常に手入れをする道具を持っておくのは、楽器奏者として基本的なこと……だと思う。

息を深く吸う。体中に空気が行き渡る。肺が冷たい空気で満たされていくのは、心地よい感覚だ。

そのままゆっくりと息を吐く。空気が鼻を通して抜けていく。もう一度息を吸い、今度は一気に吐き出す。そうして基礎練を始めた。

現在時刻は三時ちょうど。合奏開始まであと30分なので、ぼちぼち他の部員が入ってくる。結局、集中して基礎練が出来たのは最初の10分位で、次第に周りの様子が気になってしまっ、手に付かなかった。一人でいるホールは静かだけど、静か過ぎて逆に焦ってしまう。皆が入ってきてくれると、すこし賑やかではあるけど、落ち着く。

美紅は、皆といるのが怖いと言っていた。皆が、自分のことを覗みつけているように見えると言っていた。絶対にそんなこと無いのに。むしろ、みんな美紅の努力している姿に感心しているんじゃないかと思う。美紅ほど真面目な人は、そうそういないから。

彼女の悲しみを、自分の手で拭ってやれるなら、痛みを押し付けられてでも、その悲しみから解放してやりたい。

それで美紅が幸せになれるなら……な。

合奏の時間になっても、美紅はホールに姿を見せなかった。どうしてかと後でパトリーカーに聞いてみたら、体調不良らしかった。長いバス旅で、疲れた部分もあたのだろう。

合宿で初めての合奏は、ほとんどの時間を基礎練習に費やした。時間が有り余るほどあるから、休憩をはさみつつも、普段はあまりやらない基礎練も入念にやった。特に音程に関しては、普段よりずっと厳しく、ずっとチューナーと睨めっこしていたから疲れた。

長旅で皆疲れているのに、いきなりこんなにハードになるとは、予想していなかった。この調子だと、三日目の夜には皆顔が死んでるんだろうな。

合奏中、何度もトランペットパートの空席を見ては、考え事をしていた。今日、高速のサービスイリアで会話した時はあんなに元気だったのに、合奏の時間になって急に体調が悪くなるということは、ちょっと考え難かったから。でも、本当はこの合宿を休むつもりでいたのに、苦しむことを分かっていながら来ているということ自体が進歩だから、無理を言っても仕方ない。きっと明日になれば、元気になるだろう。

合奏が終わった後の夕食にも、美紅は姿を見せなかった。よほど体調が優れないのだろうか。

仲のいい友人達が、夕食のメニューで持っていける物を持っていく姿を見た。その友人達の会話を聞く限り、美紅はもうほぼ回復しているらしいが、大事をとって休んでいたという。ならば大丈夫だろう。

本来なら夕食後もう一度合奏が入るのだが、先生も美紅のことがあって少し考えたのか、合奏はなくなり、自由時間となった。練習したい者は楽器を吹いてもいいし、寝たい者はもう寝てしまっても構わない。バス移動で皆疲れていたこともあって、ほぼ全員の生徒が自分の部屋へと戻っていった。

僕は、明日の合奏に向けて、詰めておかなければならない箇所がある。折角だから今日中にやっつけてしまおうと思い、皆が行く方向とは正反対のホールを目指した。

合宿一日目―3―

合宿一日目に自主練をするような酔狂な吹奏楽部員はいないだろうと高を括っていたら、意外なことにホールの電気が点いている。珍しい。一体誰だろうか。

重い扉を押し開ける。そこには、優雅にピアノの演奏する美紅の姿があった。

「美紅。」

美紅は肩をビクツと震わせ、その反動で音楽が止まる。

「……先輩？」

美紅が恐る恐るこつちを振り向く。体調が悪いと聞いていたけど、見た感じ体調が悪いと言う感じはしない。でも、大事を取って休んでいた方がいいと思うんだけど……。

「体調の方は、もう大丈夫なのか？明日までしっかりと休んでいた方が……。」

「はい。確かにそれは言われる通りなんですけど、夕食後にピアノの練習をするっていうことが、私の日課になってるので。練習しないと、下手になりますし。それに、身体の方も、さっきよりは調子がいいので。」

「でも、体調が悪いときでも無理にやる必要は無いんじゃないか？」

「いいえ、それじゃいけないんです。一日練習しないと、それを取り返すのに三日かかるってよく親から言われます。私自身、それを実感してますから。」

「そういうものなのか？」

「はい。そういうものです。楽をすると後で自分に帰ってくるんですよ。日進月歩・切磋琢磨という様に、日々の積み重ねがとても大切なんです。どれだけ続けられるかが、そのままどれだけ上達するかという所に直結してくるんです。」

「だから、美紅は毎日ピアノを弾くのか？」

「そうです。大きな成果の為になら、私はたとえ体の調子が悪くても練習をします。しないよりもした方がずっといいですから。」

「じゃあ、美紅にとっての大きな成果っていうのは何？」

「それは、将来音楽の先生になって、生徒達の毎日を、音楽で楽しくしていくことです。これは、昔からの夢なんです。音楽の力で、生徒達の笑顔がさらに輝くようになったら、それって素敵じゃないですか。」

「確かに。でも、今は教師をやっていくにしても、モンスターペアレントみたいな大きな問題があるけど、それでも大丈夫なのか？」
「何を言っているんですか。そんなの、今から気にしていてどうするんですか。それは、その問題に行き当たったときに考えればいいんですよ。でも、例えばそのような状況になったとしても、私は必ずその壁を突破して見せます！」

饒舌に語っていく美紅が面白くて、吹き出しそうになってしまった。表情筋が緩む。

「そうか。すばらしい心構えだと思うよ。」

「はい！だから、先輩も日々の練習をもっと大切にして……って、ああ！」

美紅が、急に現実に戻されたような顔をしている。

「すいません！つい、ちょっと、語りすぎました。ごめんなさい……申し訳ないです。」

真っ赤な顔をして頭を下げてる。その姿がとっても可愛らしかった。

「謝る必要ないって。それに、元気そうでよかった。そこまで心配する必要もないみたいだ。」

「心配かけました。すいません。明日からはしっかりと合奏に出ますから。」

「ああ。でも、無理だけはしないでくれよ。突然倒れられても困るし。」

すると、美紅はふてくされたような顔をして、

「私、そんな急に倒れるほどやわな身体してませんよ。」
と言った。

ふと

「先輩って、好きな人、いるんですか？」

と聞かれる。途端、辺りの静寂が緊張に変わる。

困った。美紅は下を向いているけど、その顔は紅潮しているのだろうか。

美紅のことが好きなのは自分でも確かな感情だと思う。でも、

『美紅だよ。』

と言ってしまったら、その後僕は、美紅にどんな顔をして話をすればいいんだろう。

だから、

「……まあ、いるよ。でも、その人の隅から隅まで好きかと言ったら、そうじゃないかもしれない。」

と言うしかない。

これは嘘だ。真っ赤な嘘だ。本当は、美紅の全てが好きで、寝ても醒めても彼女のことばかり考えている。でも、その気持ちを今、本人の前で打ち明けるような勇氣は僕には無い。

嘘を吐くことは嫌いだけど、この場合仕方ない。

「そうですか……。」

溜め息混じりの返答。そして、

「私には、いますよ。その人のことを、隅から隅まで好きだって言い切れる人が。」

急だった。今まで、将来の理想論を必死に語っていた美紅が、真顔になって僕の目を覗き込んでくる。僕の目が捉える美紅の瞳は、どこまでも真っ直ぐで、どこまでも深かった。もう逃げられない。適当に流すことも出来ない。

……怖い。

これは、今までに見たことが無い目だった。部活中、メンバーと仲良く会話している美紅の楽しそうな目。昨日の夜のような、落ち込んでいるときの悲しそうで、泣きそうな目。真剣に楽器を吹いている時のまっすぐな目。そのどれにも当てはまらない、本気で人に何かを伝える時の目だった。

「先輩は、意思が甘いんじゃないですか？それじゃ、好きになってもらった人もきつと残念ですよ。本気で自分のことを思ってくれていない、中途半端な気持ち。そんな気持ちでずつとこの先もその人のことを思っていくんだったら、その想われている女性の方がかわいそうですよ。」

確かにそれは美紅の言う通りで、誰だって中途半端に想われるのは気持ちのいいものじゃない。それでも、そう言わなくてはいけない時もある。それが今。僕が好きな人は美紅で、でも美紅は今、精神的に不安定になっている。今僕が自分の想いをぶつけてしまったら、美紅はきつと壊れていく。僕の所為で。

自分の好きな人はずつと遠くに行ってしまう。美紅が好きな人も遠くに行ってしまうかもしれない。僕の所為で。

そうしたら、僕の居場所はどこにもなくなってしまう。僕が美紅に気持ちを伝える前に、美紅は僕から離れていってしまう、かもしれない。それは嫌だから、今はそう伝えるしかない。

「意思が甘いのは自分でも良く分かってるよ。でも、積極的に行っちゃまずい状況だってある。それが今なんだ。」

「それで、結局は相手の気持ちも分からないまま、全てを終わらせ

てしまうんですか？勝機が見込めなかったら、たとえば自分を犠牲に
してでも、プライドを守るんですか？」

「そうじゃない。今は時が悪いだけだ。何事もタイミングが大切だ
ろう。」

「先輩、やっぱり逃げてますよ。部活でだけ人がいいなんて、虫が
良すぎます。」

そういうなり、立ち上がって、ホールの出口へと向かっていく。

「私が好きな人は、そんなちっぽけなことで悩んでいるような人じ
やありませんから。」

そう言って、出て行ってしまった。僕は啞然としたまま、その場
を離れることが出来なかった。

わたしは、ホールを出て、自分の部屋へと戻った。部屋に戻っても誰も居なかったし、電気も点いていなかった。でも、今のわたしには居心地のいい場所。時刻はすでに九時半を回り、窓の外を見渡せば辺りは暗闇に包まれている。窓から射す月の光が、畳を明るく照らし、不気味な景色を醸している。

まだ寝るにはちょっと早いけど、身体を横にしたい気分だったから、さっきまで寝ていた布団に丁寧にシーツをかぶせた直した所で、ばさっと倒れる。ぼうっと板張りの天井を見ながら、さっきのホールでのやりとりを思い出す。

『わたしが好きな人は、そんなちっぽけなことで悩んでいるような人じゃありませんから。』

この一言で、わたしは先輩から遠ざけられる存在になってしまったかもしれない。よくよく考えれば、ホールに居たのはわたしと先輩の二人だけ。あのまま楽しく会話を続けていたら先輩に告白できる隙もあったかもしれないのに、その可能性を自分でつぶしてしまった。ほんとわたしって馬鹿だ。

悔やめば悔やむほど、自分が嫌いになってくる。こんな自分なんかに、先輩を好きになる資格なんて無いのかもしれない。でも、先輩のことは諦められない。このまま引き下がってしまったてはいけない気がする。すこしだけでも可能性があるならば、わたしはそれを信じなくてはならない。想いを伝えられずに終わってしまうよりは、駄目でも、想いを伝えて終わりたい。

ぱっと、部屋の電気が点いた。みんなが戻ってきたらしい。

「あれ、美紅いるじゃん。さっき来たときにいなかったから、みんな心配してたんだ。……一応病人だし。」

「ごめん。ホールに行ってたの。それに、もう大丈夫だから。」

「ホール？急にランペットでも吹きたくなったの？」

「ううん、そうじゃなくて、ピアノの練習をしにいったの。毎日弾かないと上手くならないから。」

みんながわたしを驚きの目で見つめてくる。これってそんなに変なことかな。

「美紅、偉すぎ。わたしだったらそんなこと出来ないよ。」

と亜由美。

うんうん。とほかのみんなも頷く。

「そうかな。毎日の習慣になってるから、弾かないと逆に調子でなくて。」

「でも、体調悪い時までは好んでやらないよ。やっぱり努力家は違うなー……。」

わたしはそんなつもりは無いんだけど、みんなからはそう見えているのかな？

「わたしって努力家なのかな。」

それがどうしも気になってしまう。特に今のわたしには。

「少なくともわたしはそう思うよ。」

と亜由美は言う。他のみんなはさっきよりも力強く頷く。そう見られてると思うと、ちよつと自分に自信がついてくる。

先輩も、この前同じことを言っていた。『美紅は努力家だから、将来困ることも少ないと思うよ。』と。

ならば、その努力家の力を今度は別の方面に使おう。努力の力を、今日の前に立ちはだかる高い壁を乗り越えるだけの勇氣に変えて、本気でぶつかっていこう。

わたしは、いつの間にか自分の気持ちに晴れていることに気付く。さっきまでのモヤモヤとした何かが、すっきりと消えている。

みんな、ありがとう。

そう心の中でつぶやいて安心したわたしは、ちよつと早いけど、騒いでいるみんなを尻目にひとり布団に入って目を閉じた。

ホールに行く前も寝ていたから、寝ようと思ってでも全然眠気が襲ってこない。とりあえず、みんなの会話を子守唄にでもしよう。

『美紅、また寝ちゃったねー。』

『だねー。よっぽど疲れてたんだね。バスの中でもあんまり顔色良くなかったし。』

『まあ、あの山道の中をクネクネ上ってきたから、疲れるのも当然だよ。』

『確かに。酔わなかっただけマシかあ。』

『車内でリバースされたら、二次被害が酷いしね。』

『このこと、美紅が起きてる前じゃ絶対話せないね。』

『どんな反論されるかは聞いてみたいけど。』
起きてます。聞いてます。

確かに、バスであんなクネクネした道を走ってたから疲れた。でも、本当はずっと考え事をしてて、体調が悪く見えただけだよ。

『それにしても、一途だねー。美紅。』

『うんうん。先輩意識しすぎてて、こっちがドキドキしてきちゃう。』

『実はさっきホールに行ったのも、先輩に会いに行くためだったとか？』

『えー、それは無いんじゃない？だって、美紅がいなくなって探してるときに、先輩がホールの方向に歩いてくの見ただよ？』

『そうかー。じゃあその線はないか。』

『無いねー。』

え？バレてる？わたしが先輩のこと好きだってこと、もうみんなに知られちゃってるの？

信じられない。いつの間にそんな情報を仕入れたんだろう。でも、わたしが先輩が好きだってことは、誰にも一回も話してないから、多分勘付かれたんだろう。何か勘付かれそうな行動を起こただろうか。いや、そんなはずは無い。だって、先輩のことは想ってるだけで、なにも行動を起こしてはいないから。

『まあ、寝言に出てくる位だから、相当先輩のことを愛し続けてる

んでしょ。』

『さすがのわたしでも、寝言に自分の好きな人の名前は出てこないと思うなあ。』

『それほど美紅が本氣ってことでしょ。だから、今は優しい目で美紅を応援してあげることが、わたし達に出来ることじゃない?』

『うん。無理矢理くっつけようと思って裏で動くのも良くないしね。』

『ってことで、無駄な詮索はしちゃ駄目だよ?美紅のためだし。』

『そだね。恋する乙女は…ってやつでしょ?』

『そそ。美紅にとってはいい話題も小耳に挟んでるしね。』

『後はどっちが先に行動を始めるかだね。』

『まあそこら辺はお二人に任せるとして、わたし達も寝ない?明日もあるし、今日は疲れたし。』

『さんせー。わたしもうクタクタ。先生一日目からあそこまで飛ばしてくるとは思わなかったよ。』

『むー……。わたしもう駄目ー。』

ドタバタと、寝支度をする音が聞こえる。それはやがて、布団に潜り込む布擦れの音に変わる。

カチツと音がして、部屋の電気が消える。

まさか、寝言に先輩の名前を出していたとは思わなかった。というか、自分が寝言を言うという事実さえも、初めて知った。それを考えると、逆に寝るのが怖くなる。今度は、先輩の名前を言ってしまうだけでなく、その想いさえも吐き出してしまいかもしれない。それを聞かれるのはさすがに困る。

わたしは、みんなが寝息を立てて寝静まるのを待ってから、どうか寝言を言いませんようにと願って、眠りに落ちた。

あ、そういえばホールに楽譜を置き忘れている。きっと、先輩が片付けとかしてくれると思うから、心配はしてないけど、明日の朝早起きして、ホールに取りに行こう。

……いつの間にか、わたしは先輩を頼りすぎていたみたいだ。いけないと分かっているけど、それはきつちりと片付けをしてしまう先輩が悪いに違いない。それは、わたしの直感だ。でも、こういう時の直感は当たる。だって、世間はそういう風に出来ているから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2393w/>

三泊四日

2011年11月21日18時55分発行